飛　魚

第 31 号

令和 2 年 11 月

社会医療法人　義順顕彰会　種子島医療センター

TANEGASHIMA
MEDICAL CENTER

理　念

島民の皆さまに愛され
信頼される病院

私たちは思いやりの心と
技術を研鑽する真摯な姿勢で
豊かな地域医療の向上に努めます

基本方針

1. 地域に根ざし、信頼される病院

・誰でも、いつでも安心して利用できる、地域に密着した病院作りをいたします。

・救急体制を充実し、24 時間対応します。

・地域医療機関などとの連携を図り、必要に応じた役割りを果たします。

2. 温もりと思いやりのある医療を提供する病院

・各部署の強い連携により温もりのあるチーム医療を行います。

・患者様の権利を尊重し、安全医療の推進に努めます。

・快適かつ安心して医療を受けられる療養環境を提供いたします。

3. 医療の質を高め、お互いに学び合える病院

・医療人として専門知識、技術の研鑽に努めます。

・患者様共々学びあい、ニーズに合った地域医療を目指します。

表紙「飛魚」：田上悠峯 書
「悠峯」とは、義順顕彰会会長　田上容正が、公益財団法人日本習字教育財団から命名された雅号です。

表紙について
2019（令和元）年12月、当センターは創立50周年を迎えました。この先の50年も「島民のための病院」という志を忘れないよう、2020（令和２）年から「しあわせの島、しあわせの医療」をスローガンに掲げました。表紙に使用した写真は、令和元年10月に病院をドローンで空撮した画像をミニチュア風に加工したもので、私たちの想いを象徴する一枚です。この美しい種子島のしあわせを守るために、全職員一丸となって取り組んでまいります。

表紙写真
空撮：SORATANE、画像加工： h design 徳留博人

目次 Contents

理念・基本方針

50周年特設ページ

巻頭言　病院長　髙尾　尊身 …… 4
理事長挨拶　理事長　田上　寛容 …… 6
会長挨拶　会長　田上　容正 …… 10
沿革（「飛魚」の歴史） …… 12
創設50周年　過去を振り返って　長野　力 …… 24
永年勤続40年を迎えて　門脇　輝尚 …… 26
医療センターと私　河野　由華 …… 27

概要

概要 …… 32
組織図 …… 35
委員会・会議組織図 …… 36
常勤医師 …… 37
職員数 …… 38
病院日誌 …… 39

実績

種子島医療センター　統計資料 …… 48
診療部門 …… 56
診療支援部門 …… 67
へき地医療センター …… 75
田上診療所 …… 77
わらび苑 …… 79
関連施設 …… 81

寄稿

空手道とわたくし …… 内科　窪薗　修 …… 84
小児科のあゆみ …… 鹿児島大学医歯学総合研究科小児科学分野　教授　河野　嘉文 …… 87
種子島医療センター設立 50周年を記念して… 鹿児島大学医学部保健学科外科分野　教授　新地　洋之… 88
モザンビークアイキャンプ …… 副院長　田上　純真 …… 89
がん化学療法看護認定看護師の活動 …… 看護師　山之内　信 …… 90
プロとして新たなスタートを切って …… テニスプレイヤー　姫野　ナル …… 91
種子島医療センターでの研修を終えて …… 92
医学生のお礼 …… 98

部門別紹介

【診療部】

外科（消化器・乳腺甲状腺） …… 115
内科・総合診療科 …… 116
循環器内科 …… 118
消化器内科 …… 119

眼科 …… 120
整形外科 …… 121
小児科 …… 122
麻酔科 …… 126
泌尿器科 …… 127
肝臓外来 …… 128
脳神経内科…… 129
糖尿病内科…… 129
血液内科…… 129
ペインクリニック科…… 130
【看護部】
看護部理念
看護部 …… 132
外来 …… 134
手術室・中央材料室 …… 137
外科・脳外科・整形外科病棟（2階病棟）…… 138
内科・眼科・小児科病棟（3階西病棟）…… 139
地域包括ケア病棟（3階東病棟）…… 141
回復期リハビリテーション病棟（4階病棟） …… 142
透析室 …… 144
クラーク室 …… 146
【診療支援部】
薬剤室 …… 148
中央画像診断室 …… 149
中央検査室 …… 151
臨床工学室 …… 153
栄養管理室 …… 155
リハビリテーション室 …… 156
各チーム紹介 …… 157
組織図 …… 162
療法士修了書一覧 …… 163
地域医療連携室 …… 164
【事務部】
総務課 …… 167
医事課 …… 168
【直轄部門】
DMAT …… 171
医療安全管理室 …… 172
システム管理室 …… 173
院内委員会活動
院内感染対策委員会 …… 176
ＮＳＴ（栄養サポートチーム）委員会…… 177
緩和ケアチーム…… 178

化学療法委員会 …… 179
看護部教育委員会 …… 180
クリニカルパス委員会 …… 182
リスクマネージメント委員会 …… 185
医療安全管理委員会 …… 186
接遇推進委員会 …… 187
輸血療法委員会 …… 188
褥瘡対策委員会 …… 188
レクリエーション委員会 …… 189

関連施設

田上診療所 …… 192
訪問看護ステーション・野の花 …… 193
わらび苑 …… 194
院内保育所 …… 196

活動紹介

新型コロナウイルス感染対策について …… 198
へいじろう紹介 …… 201
ＴＳＣ（種子島医療センターサーフィン部） …… 202
第 29回　種子島医療センター杯ジュニアバレーボール大会 …… 203
種子島医療センターゴルフ部紹介 …… 205
種子島医療センターテニス部 …… 206
３×３エクスプローラーズ鹿児島　そして、SKUNK …… 207
「遠泳大会」「併泳」 …… 209
がんサロン「よろーて」のご紹介 …… 210
転倒転落防止ワーキンググループ …… 211
認知症ケアワーキンググループ …… 212
ドクターヘリ …… 214
ふれあい看護体験報告 …… 217
リハビリテーション職業体験＆セミナー …… 219
ボランティア受け入れ報告 …… 220
令和元年リハビリテーション室現地施設見学会を開催して …… 221
熊毛圏域地域リハビリテーション広域支援センター …… 222
病院見学・実習・体験実績 …… 224
報道・広報関係 …… 225

研究・研修

業績 …… 228
医師業績・栄養士業績・看護師業績・療法士業績 …… 230
リハビリテーション室　研究発表会 …… 231
研修報告書優秀者・努力賞 …… 232
院内研修会実績・講演会実績 …… 234
永年勤続表彰者 …… 236
編集後記

巻頭言

コロナ禍の50周年記念
―「しあわせの島、しあわせの医療」をめざす―

社会医療法人義順顕彰会
種子島医療センター
病院長　髙尾　尊身

2020年（令和2年）は東京オリンピック・パラリンピックの年として長く記憶に残るはずでした。その記念すべき年を迎えようとしていた大晦日（2019年12月31日）に中国武漢で新型のウイルス感染症が流行しているというニュースが初めて報道されました。しかしその時点ではメディアの取り上げ方もまだ小さく、みんながオリンピックイヤーを迎えることに興奮し、特に注意が払われることはなかったと思います。年が明けてもしばらくはまだ対岸の火事と考えられていた新型コロナは、２月に入るとクルーズ船の横浜入港により、まるで黒船来航さながらのパニックを引き起こしました。様々な憶測やデマが横行し、店頭からはマスクや消毒薬が消え、我々医療関係者は最悪の事態に備え、緊張の中出来る限りの準備を進めました。しかし今思えば、あれは単なる序章に過ぎず、COVID-19が全世界を巻き込むパンデミックとなるのにそう時間はかかりませんでした。

一方、種子島医療センターにとっても2020年は記念すべき年となるはずでした。2019年12月8日に開院５０周年を迎えた当院は、次の半世紀の初めの一歩として「しあわせの島、しあわせの医療」をキャッチフレーズに、2020年の年明け早々から、５０周年記念イベントを始め様々な企画の準備を進めていました。これらは2月の段階で全てキャンセルとなり、代わりに全く想定外の新型コロナ対策に追われることになりました。マスクやフェイスシールドの確保から、保健所との連携と情報収集、医師、感染症専門ナースのもとで勉強会を重ね、発熱外来を設置、また感染症対策の中心となる「新型コロナ対策チーム」を編成し、連日訓練を積み重ねました。その甲斐あって、現在まで感染疑いの来院者には万全の対応が可能となっています。

しかし夏には感染拡大が下火になるのでは、という希望的観測は裏切られ、7月からの全国的な感染者の急増に、このウイルスは一筋縄ではいかないことを思い知らされました。種子島では幸いにして10月までは発症者はありませんでしたが、新型コロナに対する住民の不安は日が経つにつれ徐々に増幅されていると感じています。年末年始には帰省客と観光客の増加で、いつ陽性者が出ても不思議ではない状況となりますが、どんな事態が起きても、これまでの訓練を活かして冷静に対処しなければなりません。更には第3波の到来、また数年後に再び起こると予測される未知のウイルス感染症との戦いに向けて、貴重な経験となるでしょう。

ウイルスに感染する危険性は皆に平等にありますが、症状の有無や進行の度合いは平等ではありません。また、国の対策や地域情勢、医療そのもののレベルは平等ではないことを私たちは改めて認識するべきです。現実に、医療体制が脆弱な国々の死亡者数は貧困層に集中しています。集団免疫の獲得を目指した国もありますが、高齢者の死亡数が多く、抗体獲得とその効果期間のエビデンスが現時点では未だ不十分であることから、この試みも成功とは言えません。我が国の対応は批判されながらも、死亡者数は少なく世界から不思議がられています。しかし、新型コロナを軽視することは絶対に禁物です。特に種子島は基礎疾患を持つ高齢者率が高く、一旦感染が広がると一気に重症者が増加すると予測されるため、より一層の警戒が必要と思われます。本院でもPCR検査や抗原・抗体検査の態勢を整備し、更なる新型コロナ対策の充実を図っているところです。

種子島医療センターは地域医療の担い手として50年をかけて着実に進歩し、離島でありながら最先端の医療を提供できるようになっています。そして次の半世紀の始まりがパンデミックでも、その高い志は変わることはありません。しかし先端医療・高度医療だけでは「しあわせの医療」は実現しません。私たちは島民のしあわせに寄与する医療を目指します。疾病や症状にだけ焦点を当てるのではなく、常に患者さんに寄り添う「全人的医療」が前提にあってこそ、現代医学は生かされるのだと考えます。子供も高齢者も若者も、病気や障害を抱える人、そしてそれを支える人も、みんながそれぞれの形のしあわせを実現できるように、医療の立場から支援することもまた「しあわせの医療」の一つの目標と言えるでしょう。

医療は常に未来志向、やりがいのある仕事です。創立50周年の節目に私たちはパンデミックの中で貴重な体験をしています。今はウィズコロナの期間ですが、いつかは新型コロナも終息の時がやって来るでしょう。疾患も医療も常に変容します。私たちは、この「しあわせの島」でポストコロナの未来に向けた「しあわせの医療」への着実な歩みを始めたいと思います。

理事長挨拶

社会医療法人義順顕彰会50周年に際して
～すべての方々に感謝の気持ちを込めて～

社会医療法人義順顕彰会
種子島医療センター
理事長　田上　寛容

去る令和２年４月19日に社会医療法人義順顕彰会創立50周年記念行事が行われる予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で残念ながら中止となりました。この創立50周年記念行事は、これまで当法人の運営に関わっていただいた皆様への感謝の気持ちを伝えるための行事として、実行委員会を立ち上げて長い時間をかけて準備してまいりましたが、開催することができなかったのは非常に残念でなりません。

今回の行事に招待させて頂いていた種子島における行政、医師会、その他これまで当法人の運営に関わっていただいた種子島の方々、また鹿児島大学を始めとする島外の医療関係者の方々、その他、当法人が開設以来勤務していただいた旧職員の方々からも、有難く多数の御出席の連絡をいただいておりましたが、それは叶いませんでした。

本来であれば、直接お会いしてお礼申し上げなければならないところですが、このコロナ禍では難しく、つきましては、この紙面を借りて心より感謝申し上げたいと思います。

今回の50周年行事に際して、この50年間を振り返る時間もありました。本当にいろいろな出来事があり、本当に多くの方々の助けをいただき、本当に目まぐるしい変化を遂げてきた50年であったことを強く感じました。当法人が開設された昭和44年当時は職員数名の家族中心で運営する小さな診療所でしたが、現在は５００名以上の職員に勤務していただき、種子島における医療介護の中心となる組織として成長をとげております。これも、先代の理事長を先頭に多くの職員が一丸となって種子島の医療介護を支え、島民の皆様が安心してこの島で暮らせるようにとの熱い思いを50年もの間、途切れることなく受け継いできた成果だと思います。

今回予定されていた行事はそのひと区切りであり、これをきっかけに我々は次なる50年に向けて歩みをすすめていかなければなりません。しかし、これからの50年がどんな50年になるかは誰にもわかりません。今回のコロナ禍のように予想もつかないことが起こるかもしれません。

ただ、私たちが出来ることは、今目の前にいる病気で困っている方々を一人一人助けることだと思います。そして、この法人事業は種子島という島がある限り、そしてそこに人が住み続ける限り終わることなく、これからも発展し続けていかなければなりません。

これからも、この法人職員皆で種子島のために尽くしていきたいと思います。
改めて、これまでの50年間本当に有難うございました。
そして、今後共何卒宜しくお願い申し上げます。

こうして種子島に必要な医療をひとつずつ取り入れていき、診療科目も徐々に増えていきました。名称は「田上病院」と改められ、1994(平成6)年には内科のみならず外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、理学療法科、脳神経外科を備えるまでになりました。

2010(平成22)年に社会医療法人へ改組。2016(平成28)年4月には、島民のための病院という夢と熊毛医療圏の地域中核病院としての責任を果たすため、病院名を「種子島医療センター」と改め、新たなスタートを切りました。

現在、当法人は病院の他に中種子町に田上診療所を、その他介護老人保健施設わらび苑、訪問看護ステーション野の花を併設しております。また関連病院であるせいざん病院(精神科)や種子島産婦人科医院等の地域の医療機関、介護保健施設との密接な連携により、急性期から在宅まで、小児から高齢者まで切れ目ない医療介護を提供できる体制をとっております。

開業当時からの念願だった"島内完結の医療"を、さらに"住民が笑顔で暮らせる医療"へ。これからの50年も、「しあわせの島、しあわせの医療」を合言葉に取り組んでまいります。

理事長　田上 寛容

想いをつないで半世紀。
「しあわせの島、しあわせの医療」へ。

50th ANNIVERSARY since 1969

社会医療法人 義順顕彰会　種子島医療センターは、２０１９(令和元)年12月に創立50年を迎えました。

わずか13床の診療所からスタートした当センターは、多くの方々、さまざまな機関からご協力をいただきながら、24時間３６５日体制の救急医療をはじめ、高度な医療を行うための機器、施設、体制を整備し、２０４床を有する総合病院へと成長しました。

その一歩は、「種子島の人々の命を守りたい」という田上容正会長の想いから始まりました。１９６９(昭和44)年12月８日、実家のあったこの場所に「田上容正内科」を開院。開院当初の病室は馬小屋を改造したものだったそうで、十分な医療設備のない中、患者さん一人ひとりと真摯に向き合い続けることで徐々に来院者数は増加しました。

そんな中、当時の種子島では受けられない医療を求めて本土にわたる島の人々の精神的、経済的な困窮を強く感じるようになり、「種子島の医療は種子島で」という思いから、診療の合間を縫って行政や島外の病院へ陳情や協力の要請を重ねていきました。そうした想いは人々に伝わり、次第にさまざまな方が協力してくださるようになったのです。

会長挨拶

若き医療従事者に伝えたいこと
～開院50年を振り返って～

社会医療法人義順顕彰会
種子島医療センター
会　長　田上　容正

私が故郷の種子島に小さな内科医院を開設したのは昭和44年12月8日のことでした。医院名は「田上容正内科」としました。当時種子島には、ご夫婦で産婦人科と眼科を開設しておられた「田上医院」が既にありましたので、苦肉の策で私のフルネームを付けた訳です。開院当時私は34歳でした。それから瞬く間に50年の月日が過ぎ去り、私は馬齢を重ね85歳になりました。

郷里の榕城小・中、鹿児島市のラ・サール高校から熊本大学医学部に進学し、卒業後は鹿児島大学病院で１年間インターン生活をし、そのまま第二内科に入局しました。臨床は佐藤八郎教授の下で消化器疾患を主に学び、研究は柚木一雄教授の指導を頂き、５年をかけて「各種胃疾患における胃液分泌動態の研究」という論文をまとめ、医学博士の学位を取得しました。

今思えば開院当時は、臨床経験も医師としての人格もまだまだ未熟でしたが、若さゆえの体力と、「島民を守る医療」という熱い思いを持って診療を続けました。患者の声に耳を傾けること、診察や往診の要請を断らないことと同時に、自分の守備範囲を逸脱しないこと、専門外の疾患は必ず専門医に相談・紹介することを常に心懸けました。

開院してからは文字通り、無我夢中で働きました。午前・午後の外来診療、午後の遅い時間は往診に廻り、夕方から夜にかけて入院患者を診ました。夕食後漸くうたた寝をしていると急患の連絡が入り、眠い目をこすりながら救急車の到着を待ちました。また多いときは一晩に３回の往診の依頼に応え、白衣を着たまま外来のベッドに横になり、翌朝はそのまま外来の診療をしたことも何度もあります。そのような多忙な日々が何年も続きました。

一方で種子島の医療体制の向上を目指し、鹿児島大学病院の各診療科に医師の派遣を依頼し、少しずつ診療科を増設して行きました。小さな島の診療所は今では204床の総合病院となり、島民の健康を守る地域医療の拠点としての機能を担い、職員一丸となって日々奮闘しています。ここに至るまでに支援の手を差しのべてくださった多くの医療関係者の皆様と、頑張ってくれた病院の職員の皆様、応援して下さった地域の皆様のお陰で、どうにか50年間頑張ることが出来ました。

種子島医療センターにある医祖ヒポクラテスのモザイク壁画は、私の生家にあるヒポクラテスの肖像画の掛け軸を基に作られたものです。この掛け軸は私の曽祖父で、英国人ウィリア

ム・ウィリスに西洋医学を学んだ後、種子島で医師として人生を全うした田上義順が所有していたものです。髑髏を手にしたヒポクラテスの肖像画を眺めながら、曽祖父義順もきっと、医師として迷い、悩み、命を預かる職務の重圧に押し潰されそうになりながら、種子島の医療を担い、島民の診療にあたっていたのであろうと想像すると、感慨深いものがあります。この50年は義順の意思を守り、次の世代へと引き継ごうと奮闘した半世紀であったと言うことが出来ると思います。

私の医師としての人生も残り僅かであると自覚しています。私のキャリアの最終章というこのタイミングで、思いもかけぬパンデミックに見舞われ、地域医療のあり方、医療従事者としてのあり方など、色々と考えさせられました。医学が進歩していると言っても、新しいウィルスが蔓延すれば、医療現場は手探り状態のカオスに陥ります。しかしそれでも前に進むしか無いのです。地域医療を担う責任は重大です。後に続く次世代の医療従事者の皆さんには、医療に対する強い使命感と、他者への優しい思いやりの気持ちを持って働いてもらいたいと思っています。この美しい島で、病んでいる人、悩める人や苦しんでいる人のために、最善の医療を提供出来るように頑張って頂きたい。私の50年分の医療人としての情熱と誇り、そして大きな期待を込めてエールを送りたいと思います。

沿　革

黎明期 1969～1983（昭和 44～58）年

1969 年、会長田上容正が実家のあったこの場所に「田上容正内科」を建設。種子島の皆様に愛される病院を目指し、13 床の診療所からスタート。スタッフも医療機器も足りず、十分な医療設備のない中、島民の命を守る医療を懸命に模索した。

昭和37年東町本通り

昭和40年代前半東町海岸通り

昭和40年代天神町の埋立地

昭和40年代後半埋立前の天神前通り

（4点ともに古賀写真館提供）

1969（昭和 44）年	12月	田上容正内科開院
1980（昭和 55）年	2 月	人工透析開始
1981（昭和 56）年	9 月	医療法人容正会設立
1982（昭和 57）年	5 月	28床になる

開院当時の様子

開院を支えた病院スタッフたち

開院日からのカルテは現在も大事に保管されている

当時の透析室

当時の病院スタッフ

昭和58年の頃の田上容正会長

発展期 1984～1998（昭和 59～平成 10）年

「本土並みの医療をいつでも受けられるように」と、医療体制と質の充実を図るため施設を拡張し、高度な医療機器を導入。鹿児島大学病院から医師が派遣されるようになり、ほとんどの外科手術が可能になった。1989（平成元）年には、創立 20 周年を記念して院内報『飛魚』を創刊。

1984（昭和 59）年	３月	56床病院を新築 全身用CTスキャナ導入
	７月	医療法人義順顕彰会　田上病院設立

新築落成記念祝賀会

外科手術の様子

全身用CTスキャナ

1985（昭和 60）年	11月	病床数99床になる
1987（昭和 62）年		救急告示病院認定
1989（平成元）年	12月	20周年記念　院内誌『飛魚』創刊

平成元年『飛魚』創刊号の編集スタッフ

院内報『飛魚』創刊号

1990（平成２）年		

第２号

1991（平成３）年	７月	介護老人保健施設わらび苑開設 （入所50床、通所10名）

開苑当時のわらび苑

第３号

1992（平成 4）年		

第４号

第５号

沿　革

1994(平成６)年	1月	MRI設置 脳神経外科新設 標榜科目８（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、理学療法科、脳神経外科）
	2月	病床数202床になる
	6月	高気圧酸素治療装置導入
	7月	泌尿器科新設 標榜科目９（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、理学療法科、脳神経外科、泌尿器科）
1995(平成７)年	1月	病床種別変更（一般病床157床・療養型病床群45床）
	3月	わらび苑　痴呆棟開設のため78床に増床（痴呆20床、一般58床）
1996(平成８)年	11月	理学療法科をリハビリテーション科へ変更 リウマチ科新設 標榜科目10（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、脳神経外科、泌尿器科、リウマチ科）
1997(平成９)年	4月	眼科新設 標榜科目11（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、脳神経外科、泌尿器科、リウマチ科、眼科）
	5月	訪問看護ステーション「野の花」開設

第６号

当時の田上病院

高気圧酸素治療装置

第７号

第８号

第９号

当時の訪問看護ステーション「野の花」

1998（平成 10）年

院外処方箋運用開始

平成11年以前の田上病院

第 10 号

転換期 1999～2009（平成 11～20）年

病棟の再編を重ね、いち早く電子カルテを導入するなど、さらなる充実を目指し、新たな医療に挑む。こうした離島医療への貢献が認められ、当時理事長であった田上容正は2007（平成 19）年に医療功労賞、2008（平成 20）年に県民表彰を受賞。2009（平成 21）年には『飛魚』が院内報から年報誌に。

1999（平成 11）年

4月　田上病院院長に田上容祥就任

6月　理学療法Ⅱ認可

7月　種子島サンセット車いすマラソン大会に救護ボランティアとして参加

種子島サンセット車いすマラソン大会

第 11 号

2000（平成 12）年

2月　麻酔科、放射線科新設
標榜科目13（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、脳神経外科、泌尿器科、リウマチ科、眼科、麻酔科、放射線科）

第 12 号

2001（平成 13）年

2月　６階建に増築

5月　作業療法Ⅱ認可

６階建に増築中の様子

令和２年現在の建物

第 13 号

沿　革

2002（平成 14）年		電算室増築
	８月	循環器科新設・リウマチ科廃止 標榜科目13（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、脳神経外科、泌尿器科、眼科、麻酔科、放射線科、循環器科）
2003（平成 15）年	2月	オーダリングシステム稼働（シーエスアイ）
	4月	田上診療所開設（所長に竹野孝一郎就任）
	5月	第二種感染病床２床、結核モデル病床２床　使用許可
	6月	病床種別変更（一般病床157床から202床に ＜うち第二種感染症病床２床＞・結核モデル病床 ２床新設・療養型病床群廃止）
	8月	病床種別変更（一般病床202床のうち、回復期リハビリテーション病棟36床認可） 看護支援システム稼働
2004（平成 16）年	1月	電子カルテシステム（診療記録） 稼働（シーエスアイ）
	5月	心臓カテーテル検査開始
	6月	病院機能評価 複合B認定 地域リハビリテーション広域支援センター指定
	10月	病棟再編 内科病棟・整形病棟移動
2005（平成 17）年		
2006（平成 18）年	4月	病棟再編 15対１入院基本料（166床） 結核入院基本料（２床） 回復期リハビリテーション病棟（36床）

第 14 号

第 15 号

開設当時の田上診療所

電子カルテシステム

第 16 号

第 17 号

第 18 号

	5月	病棟再編 15対１入院基本料（202床） 3階東病棟　回復期リハビリ病棟の取り下げ 3階東病棟、4階病棟移動 結核モデル病床2床
	7月	病棟再編 15対１入院基本料（154床） 結核入院基本料（２床） 4階病棟　回復期リハビリテーション病棟（48床）
	9月	13対１入院基本料（154床）
	11月	10対１入院基本料（154床）
2007（平成 19）年	1月	心療内科新設 標榜科目14（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、脳神経外科、泌尿器科、眼科、麻酔科、放射線科、循環器科、心療内科） 田上容正理事長「医療功労賞」受賞
	12月	看護師寮新築
2008（平成 20）年	1月	中央材料室・手術室改築 田上容正理事長「県民表彰（鹿児島県）」 「市民表彰（西之表市）」受賞

第 19 号

医療功労賞表彰式の様子

看護師寮（現在は一般寮に）

県民表彰表彰式の様子

沿　革

2009(平成 21)年

4月
亜急性期病床８床運用開始（３階東病棟８床）
DPC請求開始
管理棟新築
呼吸器科新設
標榜科目15（内科、外科、整形外科、皮膚科、
小児科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、
脳神経外科、泌尿器科、眼科、麻酔科、放射線科、
循環器科、心療内科、呼吸器科）
『飛魚』が年報誌に

第 20 号

5月
薬局改築
安全キャビネット・クリーンベンチ導入

6月
「日本医療機能評価Ver5.0」　認定

9月
亜急性期病床12床へ増床（３階東病棟８床、３階西病棟４床）

10月
田上病院開院40周年記念式典

ピアニスト西村由紀江さんの伴奏で合唱する種子島中学校の生徒の皆さん

中山恭子先生（当時参議院議員）による記念講演

飛躍期　2010～2019(平成 22～令和元)年

種子島をはじめ、熊毛医療圏の地域中核病院としての責任を果たすため、社会医療法人として再出発。創立からの目標であった島内完結医療の実現に向け、他の医療施設や介護保険施設と連携を取り、未来を見据えた新しい離島医療に取り組む。

2010(平成 22)年

2月
リウマチ科新設
標榜科目16（内科、外科、整形外科、皮膚科、
小児科、耳鼻咽喉科、リハビリ
テーション科、脳神経外科、泌尿器科、
眼科、麻酔科、放射線科、循環器科、
心療内科、呼吸器科、リウマチ科）

第 21 号

4月
社会医療法人認定、改組
会長に田上容正就任
理事長に田上寛容就任

	6月	副院長に田上純真就任
	8月	ハイケアユニット４床設置（２階病棟） 鉄砲まつり手踊り参加
	12月	「鹿児島県がん診療指定病院」指定

鉄砲祭りに参加

2011(平成 23)年	4月	消化器内科新設 標榜科目17（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、脳神経外科、泌尿器科、眼科、麻酔科、放射線科、循環器科、心療内科、呼吸器科、リウマチ科、消化器内科）
	8月	新電子カルテシステム稼働（ソフトウェア・サービス）
2012(平成 24)年	9月	亜急性期病床16床へ増床 （３階東病棟12床、３階西病棟４床）
	11月	ハイケアユニット４床廃止
2013(平成 25)年	1月	介護保険訪問リハビリ開設
	4月	亜急性期病床20床へ増床（２階病棟８床、３階東病棟8床、３階西病棟4床）
	5月	320列CT導入 MRI更新 検査室、小児科周り改修工事

第22号

第23号

第24号

沿　革

2014(平成 26)年	1月	X線TV装置（X線透視装置）更新
	2月	生化学検査機器更新 自動精算機１、２号機更新
	3月	DMAT隊結成
	4月	副会長に田上容祥就任 病院長に髙尾尊身就任 副院長に山口智代子就任
	8月	放射線室内ネットワーク機器更新
	9月	検査画像統合システム・放射線情報管理システム更新
	10月	亜急性期病床廃止 遠隔医療支援システム（SCOPIA）稼働
	12月	自動分包機稼働
2015(平成 27)年	1月	病棟再編 ３階東病棟　地域包括ケア病棟42床
	4月	脳神経外科医師の非常勤体制開始 （常勤医不在） へき地診療支援センター開設 （センター長に猿渡邦彦就任） 法人事務局長に羽生守彦就任 肝臓内科、腎臓内科、血液内科、糖尿病内科、神経内科、 消化器外科、肝臓・胆のう・膵臓外科、乳腺・甲状腺外科新設 標榜科目25（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、 リハビリテーション科、脳神経外科、泌尿器科、眼科、 麻酔科、放射線科、循環器科、心療内科、呼吸器科、 リウマチ科、消化器内科、肝臓内科、腎臓内科、 血液内科、糖尿病内科、神経内科、消化器外科、 肝臓・胆のう・膵臓外科、乳腺・甲状腺外科）
	5月	遠隔病理診断システム導入 末血検査機器更新 医師住宅５棟完成（松畠） ステラッド滅菌器更新 ペインクリニック内科新設 標榜科目26（内科、外科、整形外科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、 リハビリテーション科、脳神経外科、泌尿器科、眼科、

第 25 号

第 26 号

麻酔科、放射線科、循環器科、心療内科、呼吸器科、
リウマチ科、消化器内科、肝臓内科、腎臓内科、
血液内科、糖尿病内科、神経内科、消化器外科、
肝臓・胆のう・膵臓外科、乳腺・甲状腺外科、
ペインクリニック科）

6月　鼻用手術装置導入

7月　田上診療所休診（８月末まで）
耳鼻科手術開始

8月　回転用X線撮影装置更新
外科用X線テレビシステム更新

9月　病理解剖１例目実施

10月　脳神経外科　常勤医師による診療開始

2016(平成 28)年

1月　無停電源装置更新

第 27 号

3月　結核病棟の陰圧工事

4月　病院名を種子島医療センターに変更
病院長補佐に花園幸一外科部長、北園和成内科部長を任命
看護局長に山口智代子就任
看護部長に戸川英子就任

5月　「地域がん診療病院」指定（厚生労働省）
がんサロン「サロン種子島」開設
医師住宅（単身赴任者用）２棟完成（松畠）
眼底撮影システム一式更新

現在の医師住宅

8月　全自動散剤分包機（Sinngle-R93ZⅡ）更新

9月　病院内空調機更新
訪問リハビリテーションを訪問看護ステーション「野の花」に編入

10月　鹿児島県行政視察（県議会環境厚生委員会）

12月　超音波診断装置ARIETTA70更新
生体情報モニターシステム（オムロンV7000）更新

沿　革

2017(平成 29)年	1月	種子島医療センター病院祭
	2月	病理解剖２例目実施
	3月	医師住宅２棟完成
	4月	わらび苑施設長に猿渡邦彦就任
	5月	鹿児島県総合防災訓練参加（DMAT隊）
	7月	内視鏡室改修および内視鏡システム更新
	9月	ベッド更新10台
	10月	「日本ヒト細胞学会学術集会 in 種子島」開催(大会会長 髙尾尊身病院長) DMAT訓練に参加
2018(平成 30)年	3月	平成29年度西之表市災害対策訓練参加 医師住宅２棟完成
	4月	わらび苑施設長　猿渡邦彦　種子島医療センターへ異動 わらび苑施設長に池村紘一郎就任 ベッド更新50台 看護師特定行為研修者養成開始（2名を鹿児島大学へ派遣）
	6月	IABP装置導入 「Life on the long board 2nd wave」映画撮影
	7月	ベッドサイドモニター２台 人工呼吸器２台増設

第 28 号

病院祭にて。諏訪中央病院名誉院長
鎌田實先生による特別講演

日本ヒト細胞学会学術集会in種子島。
挨拶をする髙尾尊身病院長（右写真）

種子島空港にてDMAT訓練

第 29 号

	8月	副病院長に濵之上雅博就任 眼科用検査機器一式更新 鉄砲まつり手踊り参加 救急自動車導入
	9月	「ジロ・デ・種子島2018」サイクリング大会救護支援
	10月	種子島医療センター看護PR大使に松原奈佑さん（女優）を任命
	11月	病理解剖３例目実施 電話機交換、配線工事 厨房床改修工事 日本病院機能評価機構による病院機能評価　受審 病院近隣土地の購入（1,940.86㎡）

2018年鉄砲まつり

新入職員歓迎会

2019(平成31/令和元年)年	1月	社会医療法人に係る実地検査（鹿児島県）
	3月	駐車場拡張工事
	4月	鹿児島大学に寄付講座「心血管病予防分析学講座」設置 事務部に広報企画課設置
	5月	病院機能評価（3rdG：Ver. 2.0 ）「一般病院２」認定

第30号

現在の種子島医療センター

現在のDMAT隊

令和元年の忘年会

令和２年１月、新年最初の全体朝礼

創設50周年　過去を振り返って

長野　力

田上病院、(現)社会医療法人種子島医療センター創設50周年記念を迎えるに当たり、心からお喜び申し上げます。

最初から病院建設や経営に係った者として、幾らかの想いを辿ってみたいと思います。

病院は昭和44年12月に田上容正内科として、島の診療所として始まり、病院拡張と併せて診療科増設や医療体制の充実等を図りながら、現在は社会医療法人義順顕彰会種子島医療センターの名のもと、種子島の総合病院、救急病院として、島民医療のために活躍している姿を見て、当時の事が蘇ってきます。

銀行勤務を最後に、島を出てから23年振りに昭和57年に東京から種子島に帰り、最初の病院建設計画に係った者として想い出は数多く胸に焼き付いております。

帰島前は太陽神戸銀行渋谷支店(現在・三井住友銀行)として働いていましたが、義兄から田上容正内科を拡張し、島民のために総合病院を造りたいとの建設計画を聞かされ、一緒に病院経営をやらないかと話が有ったのが始まりとなったわけです。

これは自分の将来を左右する大きな問題でもあり、考え迷いの日々だったことを思い浮かべます。

金融や経営には幾らか知識や関心は有りましたが、病院経営や医療分野には何らかの知識も無く決断が出来なかったことを思い出します。

しかし、再三に渡り義父(田上義直)から話が有り、医者は医療に専念してもらうが、病院経営を見てくれないかと、島の患者さんの為に帰ってこないかとの熱い話が有り、それに燃えるものを熱く感じる事でした。

それは、自分の心の中に有るふるさと種子島を思う気持ちと二重三重と重なり、島に帰る決断をした事を思い出すところです。

最初のつまらない思い出を挙げると、一つは医事係がレセプト点検をしているのを「何をしているのか」と聞いたら、皆からレセプト請求をも知らないとは「事務長としてダメだね」と言われて大笑いされた時のことが忘れられません。

このことは、自分は初めて別世界に来たのだなというのが実感でした。

それから医療事務に関するテキスト等を取り寄せて勉強したことが、正に病院生活の始まりと成った訳です。今でも当時の想い出として心に強く焼き付いており懐かしい限りです。

その後、病院建設は計画に合わせて順次進めることになりますが、地域の方々や関係機関の協力があり、多くの人が期待してくれていたことに、心強く感じたことを忘れられません。それは、決して忘れてはいけないと心に言い聞かせることでした。

何よりも、一番の苦労は医療スタッフの充足でしたが、特に看護師や理学療法士の確保は必須条件であり、色々な情報をもとに走り回ったことが昨日のように頭に浮かんできます。更に、増床と診療科増設に伴う医師確保が最大の課題となり、鹿児島大学病院への医師派遣の要請が最大の仕事でした。自分は大学病院や医局の事は全く知識がなく、その独特の雰囲気の中

での交渉事となり大変に厳しく難しかったことを覚えております。

離島の医療体制の確立及び診療科の充実の為の病院建設であること等を十分に説明してご協力を頂き、前に向かう事が出来るようになった事に安堵したことを思い出されます。

当時は色々なことが不十分な中で、職員が気持ちを一つにして、新しい病院を創り上げるのだとの強い想いの中で職務を遂行してくれたことや協力いただいたことが、今日の病院が作り上げられたものと確信を持ち、今も心に強く焼き付いているところです。

その後も医師、医療スタッフ、職員が一体となり、病院の理念のもとに種子島の総合病院、及び救急病院として整備されてきたわけですが、これも鹿児島大学や医療機関及び島民の協力と理解があって、今日を迎えて居るものと思われ、さらなる発展を期待するものです。

これから社会全体への貢献を含めて、発展的に組織を改組して、社会医療法人「種子島医療センター」として運営されて来ており、当初の目標や理念等に発展的に向かうものとして、大変うれしく敬意を表するものです。

昭和59年3月には病床数28床が56床になり、いよいよ病院としてのスタートを機に法人名を「容正会　田上病院」から「義順顕彰会　田上病院」に変更し、大きな飛躍に想いを託したことを思い浮かべます。

その後、昭和60年11月には99床に増床し順調に動き出したことを見て、国で新たに始まった「老人保健施設」が、県下でも未整備であり、これからの高齢社会に備えて、直ぐに計画に入ったのが記憶に残っています。

国が進める新たな老人施設整備であり、その概要は詳しく解ってない為に、一からの勉強となり、大変に興味深く取り組んだことが印象深く焼き付いています。

厚生省の研修会等に参加し、法律の狙いや施設の概要等を聞き、これから高齢者社会を迎える種子島には必要な施設だと判断され、計画の運びとなり、平成3年に現在の老人保健施設「わらび苑」の開設と成った訳です。

何よりも初めての施設であり、私を含めてすべての職員が手探りの状態でしたが、入居者や家族の方に喜んで貰える施設にしようと研修を重ねて頑張って頂いた訳です。時代の流れの中で順調な運営が為されているとお聞きし、当初の状況が懐かしく、熱く目に浮かぶことです。

平成6年2月には病床202床、診療科増設等整備され、その後も医療体制の充実も図られ、今日の50周年を迎えられた事に心から敬意を表しお祝い申し上げます。

私自身は当初の病院計画もほぼ終了に近づき、運営も円滑に動き出したものと考えて田上病院を去り、平成17年から西之表市長として3期12年間市長職にあり、平成29年2月に退任したところです。

当時一緒に働いた職員も孫を持つ身となり、おじいさんやおばあさんに成った人もいると聞いております。皆の顔を思い出し、ご苦労さんと声を掛けたい想いで一杯です。

島民の医療を守り、安心を与えてくれた田上病院、現在の種子島医療センターの皆さんへ感謝申し上げ、今後とも島民の医療の為に頑張って頂くことを強く願うところです。

永年勤続40年を迎えて

門脇　輝尚

思い返せば、まだ初々しく、頭髪も持て余す程あった、昭和53年、何も知らない純粋むくな私は、当院へ18歳の若さで入職させていただきました。

当時はまだのんびりとした感じで時間も流れていました。しかしそれから8年後はバブル絶頂期の波に飲み込まれ、いろいろ大人の勉強もさせていただき、飲む打つ（？）〇うも人並みに経験してきました。ただし仕事に関しては常に真正面に向き合い、一生懸命に取り組んできた自負もあります。また40年の間には透析室の患者さんの様子も変わり、高齢化も進み当時とはまったく変容してきています。診療科の数も増え喜怒哀楽の大小の波にもまれながらあっという間の40年でした。しかし病院の発展、様変わりを常に見つめながら過ごした40年間は公私ともに充実した日々であったと思います。

あと何年続けられるかわかりませんが、残りを自分の集大成として過ごしていきたいと思います。

医療センターと私

河野　由華

お菓子につられて、リハビリをしていた幼少期。嫌々ながらもなんとなくリハビリに来ていた小学生時代。夏休みに立位台に立たされながら宿題をやっていた中学生時代。車いすマラソンを本格的に始めたことで、リハビリにちゃんと向き合えた高校時代。私にとって、医療センターは「リハビリをする場所」でした。それが５年前の春に「リハビリをする場所」から「職場」へ変わりました。今回、このような機会をいただいたので少し恥ずかしい気持ちもありますが、振り返ってみたいと思います。

まずは、幼少期。記憶にはありませんが、リハビリを始めたのは３歳でした。担当の先生の顔を見ただけで泣いてしまう子で、ほとんどリハビリもせずに帰ることが多かったと母から聞きました。かろうじて、残っている記憶は４、５歳頃。リハビリ前に担当の先生と一緒に地下の売店でチロルチョコとアンパンマンのキャンディを買って、食べてからリハビリをするのが当時のお決まりの流れでした。

そして、小学生の頃。勉強、特に算数が嫌いで体を動かすことが大好きな小学生でした。少人数の小さな学校だったこともあり、車いすだからと特別扱いされることもなくそのおかげで、私も障害があるということを特に意識することはありませんでした。だからほぼ全ての行事に７人のクラスメイトと一緒に参加しました。特に印象に残っているものは、５、６年生で参加した赤尾木湾横断遠泳大会です。約１キロの距離を各小学校で列になり、エンヤコラという掛け声をかけながら泳ぎます。私は、腕に浮き輪を付けて参加しました。それさえあれば泳げるのですが、手だけでしか泳ぐことができないので、みんなから遅れないよう父にサポートしてもらいながら泳ぎました。ちゃんと練習もして、浮き輪もついているにもかかわらず、海に入るまでおぼれたらどうしようと不安だったのを覚えています。ゴールしてメダルを貰ったときは嬉しかったです。自信もつきました。おそらくこれが、初めて達成感を味わえた今となっては貴重な経験です。今でもあの掛け声を聞くと当時のことを懐かしく思い出します。

そして、中学生の頃。反抗期真っ只中で、何をするにもやる気がなく、何かやりたいことがある訳でもなく、最初からあきらめてしまうような冷めた中学生でした。小学校の頃に比べて、体育の授業や、持久走大会などの行事に見学することが多かったり、同級生に心無い言葉を言われたりすることもありましたが、たくさんの同級生にもまれながら身も心も強くなれた気がします。私が入学する年に中学校が統合され、種子島中学校になりました。少人数の学校から入学してきた私にとって、40人のクラスメイトがいる教室は衝撃的でした。「どこだ？こ

こ」と思いました。最初は、戸惑ってばかりでしたが徐々に慣れていきました。２年生の時には、友人もできて、授業中寝そうになったり、机に落書きをして遊んでいたり、先生に怒られたこともありましたが、学校が楽しくて仕方ありませんでした。３年生の時、卒業後の進路をどうしようか迷った時期もありましたが、学校の設備面や人の多い環境にいることに疲れを感じていたこともあり養護学校の高等部に決めました。中学生の頃にほとんどしなかった勉強をちゃんとやりたいという思いもあったのかもしれません。

そして、高校生の頃。今度は先生とマンツーマンの環境になります。入学当初、ちょっとゆっくりできるかな？と思っていましたが違いました。いつも何かに追われていて、今までの学生生活の中で一番忙しいというか充実した３年間でした。勉強はもちろん、障害者スポーツ大会、種子島サンセット車いすマラソンのトリムの部・ハーフの部、大分国際車いすマラソンなどたくさん挑戦しました。障害者スポーツ大会では、２年生の時には、日常用車いす３年生の時には、競技用車いす（レーサー）で200メートル走に参加しました。それぞれで金メダルと銀メダルを貰うことができました。正直に言えば、１種目あたりの参加選手が少ないので、走る前からメダルがもらえることは確実なのですが（笑）それでも表彰式の時は嬉しかったです。そして、この大会に参加したことで、たくさんの人との交流も出来ました。クラスメイトのいなかった私にとっては、すごく楽しい時間でした。

種子島サンセット車いすマラソンでは、１年生の時、トリムの部に参加しました。トリムの部は500メートルを事前にタイムを申告して、そのタイムを目指して走るものです。小学生の時10位くらい、中学生で3位、この時3回目の挑戦で2位でした。学校の先生や友人などたくさんの人が横断幕を持ちながら応援してくれました。来年こそ1位をとろうと意気込んでいたのですが2年生の時、ハーフの部へ移行します。2年生の時には約5キロ走りました。もう限界でした。次回は、もっと走れるようになろうと思いました。そして3年生の時、約12キロ走ることが出来ました。途中でパンクのアクシデントがあり、動揺しましたが走り続けました。ゴールまで走れるんじゃないかというくらい元気でほとんど疲れを感じていませんでした。走り終わった時、タイヤはぺしゃんこでした。そして、11月には大分県で行われる大分国際車いすマラソンにも参加しました。この大会では、途中でレーサーのステップ台が落ちるというハプニングがあり、3キロも走らないうちにリタイアした悔しい思い出のある大会です。でも、この大会に参加するにあたり、見た光景は忘れられません。ホテルで見たエントランスに並ぶすごい数のレーサー、健常者より障害者が多い光景、選手が自分でレーサーを組み立て、メンテナンスをして練習に行く姿、大会当日に見た参加選手の多さ、どれも衝撃的でした。

車いすマラソンの挑戦を決めたことで、リハビリの内容もガラリと変わります。今までのリハビリは、日常生活を送りやすくするためのリハビリでしたが、車いすマラソンに向けてのリハビリに変わっていきました。ストレッチ、ダンベルを使った筋トレなどありとあらゆることをしました。息が上がりすぎて、放心状態になることもしばしばでした。もちろんきつかったですが、車いすマラソンで少しでも長く走るためだったので嫌ではありませんでした。むしろ

楽しんでいました。また大会の１か月程前になると、車通りの少ない早朝に実際のコースに行って練習しました。眠い目をこすりながらレーサーに乗り、前後を車で囲んで隣でリハビリの先生に自転車で並走してもらいながら走りました。

走り終わる頃には、自分で体のコントロールも出来ないほどフラフラでしたが、どこか清々しい気持ちだったのを覚えています。

また、高校3年生の時に担任の先生から言われた一言で印象に残っているものがあります。それは、「週2でリハビリに行けるなんて幸せだね」言われた時は意味がよく分かりませんでした。しばらく経ってから自分が恵まれた環境にいることに気づきました。そのおかげで今の体が保たれていることに気づきました。

そして、高等部を卒業し、医療センターに入職します。就職して数ヶ月後、種子島中学校で行われる車いすマラソンシンポジウムで講演することになります。まさか母校で講演をすることになるとは思ってもみませんでしたが、講演に行った時の恩師の先生方の嬉しそうな表情や中学生の真剣な表情を見て恥ずかしさはありましたが、話せてよかったと思いました。そして、あっという間に4年が経ちました。今現在の私の仕事内容は、主に勉強会のポスターや市の広報誌に掲載する広告を作成しています。広告を作る際には、事前に掲載する内容を相談し、それから自分でどんなレイアウトにしようか考えていくのですが毎回悩みます。悩みすぎて、完成しないんじゃないかと思うことも多々あります。でも、看護局長や周りの方々のアドバイスのおかげで完成させることが出来ています。完成した時は達成感でいっぱいです。その他にも５年の間に任せてもらえることも増え、嬉しく思うのと同時に、今まで人にお願いすることの多かった私にとって「ありがとう」の言葉にすごくやりがいを感じています。これからも一つ一つの仕事にしっかりと取り組んでいきたいと思います。

最後に、私の周りには応援してくれる人がたくさんいます。両親、リハビリの先生、学校の先生、友人…応援してくれる人がいるから頑張れました。本当に感謝しています。これからも笑顔で精一杯頑張ります。引き続きよろしくお願いします。